

コンタクト・ゾーンとしての飲酒空間

——エチオピア農村部コンタ特別郡の事例から

山野 香織

1 はじめに

エチオピア農村部において広くみられるローカル・ビールの醸造は、人びとの生業の一つである。醸造の担い手は主として女性であり、とくに寡婦の女性や学校教育を受けていない女性にとってビールの醸造は重要な生計手段ともなっている。

しかし、20世紀半ばのプロテスタント系キリスト教の浸透によって飲酒の習慣は徐々に変化を遂げてきた。それまで人びとの食生活の一部として飲まれてきたローカル・ビールの消費量がプロテスタントの信仰上の規制にともなって減少し、それに代わって非アルコール飲料が生活のなかに取り入れられるようになった。

本稿ではこのようなエチオピアにおける飲酒習慣の変化に注目し、飲酒を取り巻く空間における多様な現象を考察していく。飲酒空間は、ローカル・ビールに取って代わって現れた非アルコール飲料を含む、飲酒の禁忌と許容が交じりあった「異質なものが共存する局面」[西井 2006:2]としての「コンタクト・ゾーン」ととらえることができる。具体的には、多様な集団の接触する領域として、またキリスト教と土着の人びととの接触によって変化してきた領域として位置づけられる。

アフリカ農村部におけるローカル・ビールにはこれまでさまざまな考察がなされてきた。たとえば、ビールが伝統儀礼や社会的な交渉における象徴的役割を果たしてきたという指摘や [Hallpike 1972 ; Luning 2002], 近年では経済の自由化にともなってローカル・ビールが「商品」化されているという議論である [Roberts 2000]。ビールは、主な造り手である女性の現金収入源であるとともに、農村における女性の地位や生活を支える役割をもつことも報告されている [杉山 1996]。飲酒に関しては、陶酔をまねくアルコール飲料が人びとの社交性を強めるものとする見方や [Partanen 1991], とくに男性間の社交性を容易にするものとしてアルコール飲料を位置づけ、飲酒は「人びとが出会い必要な情報と日常的な情報を交換する」役割を果たすものとする見方もある [Bryceson 2002]。

しかしながら、必ずしも飲酒の場が男性同士の社交場であるわけではなく、そこでは社会的に区別された多様な集団（異民族）が混在している。また、女性はビールの造り手・売り手として描かれてきたが、本稿では飲酒空間における飲む側としての女性にも注目したい。

2 調査方法

本稿のデータは、2006年から2007年のうち約5ヶ月間にわたるエチオピア西南部コンタ特別郡にあるC村での聞き取りと参与観察から得られたものである。なお、調査はエチオピアの共通語であるアムハラ語と現地語であるコンタ語を併用しておこなったが、本稿に記載した現地語はすべてコンタ語である。ただし、コンタ語の正記法は確立していないので、現地で聞き取った言語は筆者がアルファベット表記で記録している。

3 調査地の概要

エチオピア西南部コンタ特別郡¹⁾（以下、コンタ）は、南部諸民族州に位置する（図1）。人口約82,000人を擁し、40の行政村（カバレ／*kebele*）から成っている。コンタは1889年に当時のエチオピア帝国の支配民族であったアムハラ人に征服され、この頃からアムハラ人の宗教であるオーソドックスが徐々に広まっていった。1930年代には、貨幣経済の浸透によってそれまでの物々交換から貨幣交換へと移行している。また1974年以降の社会主義政権によって、農地改革や民族同化政策などがおこなわれ、コンタではそれまで続いていた王権が崩壊し、行政村がつくられることになった。

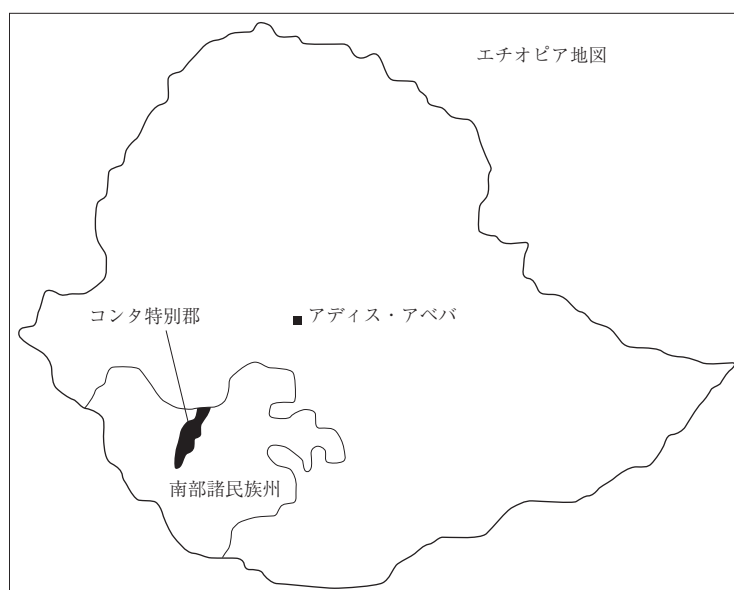


図1 エチオピア南部諸民族州コンタ特別郡の位置

筆者の主な調査地はその40の行政村のうち、C村という人口約1,677人（1991年）の散村集落である。住民はキリスト教徒で、プロテスタントが約90%、オーソドックスが約10%である。オーソドックスはアムハラ人を中心に広まったエチオピアの国教である。

C村にはコンタの中心部から車道が通っており、人びとが容易に行き来できる。幹線道路沿いの一帯には定期市の広場があり、バーや飲食店を開く家や小さな売店が立ち並んで

いる。標高は約1,200 mで、エチオピア特有のテフというイネ科の穀物のほか、トウモロコシやモロコシなどが栽培されている。男女の分業がみられ、家庭菜園での自家消費用の作物をのぞいて農作業はすべて男性が担っている。

4 C村におけるプロテスタント化

2007年1月28日（日）、この日は朝8時頃からC村を横切るシュシュマ川のほとりで、聖歌隊を先頭に人びとが集まっていた。紫色の衣装を着た聖歌隊の太鼓のリズムに合わせて人びとが手拍子や足踏みをしながら歌い、川の中では10代の青年たちの洗礼式がおこなわれていた。これが1時間ほど続いてから聖歌隊とともに人びとが歌い踊りながら、川から3 kmほど離れた教会へと移動する。そして教会で説教がなされた。この日はコンタ以外の地域からも信者たちが集まっているので、牧師の説教はコンタ語とアムハラ語の二人の牧師でおこなわれる。歌の伴奏は太鼓のほかエレキギターやカセットテープが用いられる。このような説教と歌は午後1時くらいで終了し解散する。その後、人びとは広場の定期市で食事をしたり買い物をしたりして帰るのであった。

これは、年に一度の大規模なプロテスタント集会の様子である。牧師によると、この集会の目的はすべての力を一つにして悪魔（セタン／*setan*）を追い払い、より強力で新たな力を得るためだという。このような盛大なプロテスタント集会を開くに至るまで、C村はどのようなプロテスタント化の過程を経験してきたのだろうか。

プロテスタントの布教活動は主にエチオピア南部において実施された。伝道師たちは学校や医療施設、教会などを建設し、言語調査を実施して聖書の翻訳にも着手した。コンタでは20世紀半ば頃から急速にプロテスタントの布教活動がおこなわれ、伝統的な精霊崇拝の信徒数が減少した。C村に福音派のプロテスタント系ミッションが入ってきたのは1970年頃、ハイレ・セラシエ皇帝期末期だといわれている。村長（50代）によると、C村は他の村と比較して低地でマラリアや家畜の伝染病が流行しており、外国人が薬を運んだり治療をしたりするためにやってきたことと重なって、布教活動を容易にさせたのだという。

それまで精霊崇拝を信仰していた人びとがプロテスタントに改宗する理由として、「階級制のある在来の伝統宗教の否定」[Naty 2005]が挙げられる。エチオピア南部では一般に、土器職人や^{なめ}髹し職人、鍛冶屋などの社会の低位に位置づけられる人びとがプロテスタントに改宗することが多い。彼らは伝統的な宗教体系のもとでは、高位の人と飲食を共にすることなどが禁じられていたが、平等性を主張するプロテスタントに改宗することでその差別を乗り越えることができた。また、「病気の治療を求めることができる」という利点や「コミュニティ・サポートを提供してくれる」ということも、プロテスタントに改宗する動機である。

C村の教会の牧師はプロテスタントに関して、「悪や病気を追い払うもの」と主張する。C村に教会が設立したのは1993年。それまでは茅葺きの家を集会所として利用していた。現在の教会は信者たちの寄付によって成り立っており、貧しい人や病気の人をサポートする活動もおこなっているという。



写真1 プロテスタント教会での礼拝の様子

人びとが住んでいる。彼らは外部から浸透してきたプロテスタントを拒否し、自らの信仰生活を維持しながら生活をしている。C村に住む住民たちもかつてはボッドソント²⁾を信仰していたが、プロテスタント改宗後はそれらを軽蔑する傾向にある³⁾。教会敷地内に住む女性³⁾は次のように語っている。

精霊崇拝の人たちが死んで減っていくと、人びとは徐々にプロテスタントに改宗していきました。ボッドソント信仰の司祭に対し、人びとは見返りとしてお金や家畜などを与えました。お金がなければ、代わりに自分の娘を与えました。女の子は結婚させられ、男の子であれば畑仕事をさせられるのです。プロテスタントはそのような物や子どもを与えるという行為に反対しました。それ以降そのような贈与はおこなわれていません。私は今はボッドソントの人たちとは交流がありません。 (女性、60代)



写真2 ボッドソント信仰の司祭(右)と司祭の母親(左)

タント系ミッションによる生活支援への期待から、プロテスタントを積極的に受け入れる人が増えていった。

しかし、プロテスタントには改宗せず元来の精霊崇拝を継続する人も僅かながら存在する。精霊崇拝の種類はいくつか存在するが、C村の周辺ではボッドソント²⁾(*Bodsonda*)信仰が普及していた。ボッドソントとはズガ(*Ziga*)という大木に宿る精霊の名前であり、その大木が崇拝対象となっているこの地の伝統宗教の名前でもある。

C村の隣に位置する高地のG村には、現在でもボッドソントを信仰する

他方で、現在のボッドソント信仰の司祭であるシェファシェ(仮名、58歳)は、プロテスタントは「コンタの文化を汚すもの」と強く否定している。司祭は現地ではアラマ(*alaama*)と呼ばれており、通常は呪医として知られる存在である。

人びとのプロテスタントへの改宗はけっして強制的なものではなかった。しかし、土着の宗教を土台とした生活におけるいくつかの制限と、プロテス

5 飲酒習慣の概況

「プロテスタントの信者はアルコール飲料を飲んではいけない」と、C村の教会の牧師は言う。これはエチオピアにおけるプロテスタントの共通概念である。しかし、C村におけるローカル・ビールの醸造は依然として女性たちによっておこなわれ、以前と変わらぬ量の飲酒を続ける人もいる。即ち、禁酒という信仰規制がある一方で、信仰とはかけ離れた時点で飲酒習慣が持続されている。この章では、現在のC村におけるアルコール飲料の種類と、定期市での飲酒の様子について述べる。

5-1 アルコール飲料の種類

(1) ファルソ (*farso*)

一般的にコンタのローカル・ビールとして昔から飲まれているのがファルソという雑穀酒である。テフやトウモロコシ、モロコシなどの穀物を原料としている醸造酒で、濁酒のようにどろどろとしていて腹もちがよいとされている。アルコール度数はそれほど高くなく3~5%ほどだといわれているが、実際は主に定期市で売るために醸造するのが一般的であるため、水で薄めてさらに低い度数となる。定期市では大体コップ3杯1ブル(1bul ≒13.5円)で売られている。

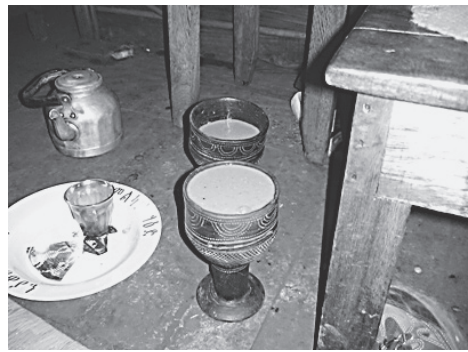


写真3 土器の容器に注がれたファルソ

醸造には3日間ほどかかる。定期市の日を狙ってその日に出来上がるように常に計画的に造られる。チャバラ定期市広場の近辺に住む女性バライネシ・アデイス(仮名, 30代)はファルソと次に説明するアラキ造りを主な収入源としている。彼女には夫がいるが、第2夫人のためこの家の世帯主となっている。4人の子どものお手伝いの女性、その息子の計7人で暮らしている。

(2) アラキ (*arake*)

アラキは北部のアムハラ人から伝わった蒸留酒である。主にトウモロコシ、モロコシ、コムギ、そしてパンを砕いたものなどを原料とし、アルコール度数は30~50%だとされる。

アラキは街のバーでも手に入り、それはしばしばエリート階級の飲み物とみなされる傾向にある。農村部においてもローカル・ビールより高価な飲み物とされ、小さなコップ1杯1ブルで売られている。アラキはファルソとは違い、家族の集まりのために造ったり客のもてなしに振舞われたりすることはなく、主に売買のためにある。また、度数の高さから酔いを楽しむ目的に飲むことが多いと考えられる。

製造プロセスは7日間を要し、日曜日の大きな定期市で売るために造られる。アラキはC村において一般的な蒸留酒として浸透しているものの、暴力や泥酔を引き起こす危険な

飲み物とみなされている。

5-2 飲酒の場

(1) 定期市



写真4 定期市の広場にアラキを飲みにやって来る人たち

コンタでは幹線道路が開通したことによって地域間の移動が比較的容易になった。C村にも幹線道路が通っており、定期市には多様な地域から人びとが集まる。市場はとくに行政の取締りを受けていない。

C村では週に3回の定期市が開かれる。とくに大きな日曜市では、場所確保のために午後2時頃から物売りたちが集まって来る。まず一番早くから目に付くのがウシやヒツジなどの家畜とテフ売りである。その後は穀物類、果物類、豆類、香辛料、コーヒー売りたちが場所取りにやって来る。売り場所はたいてい決まっていて、同種の物売りがまとまることが普通である。ファルソやアラキなどのアルコール飲料もまた、決まったスペースで売られている。

広場から離れた所に住む人や近隣の女性たちは、家でファルソやアラキを造り、それを

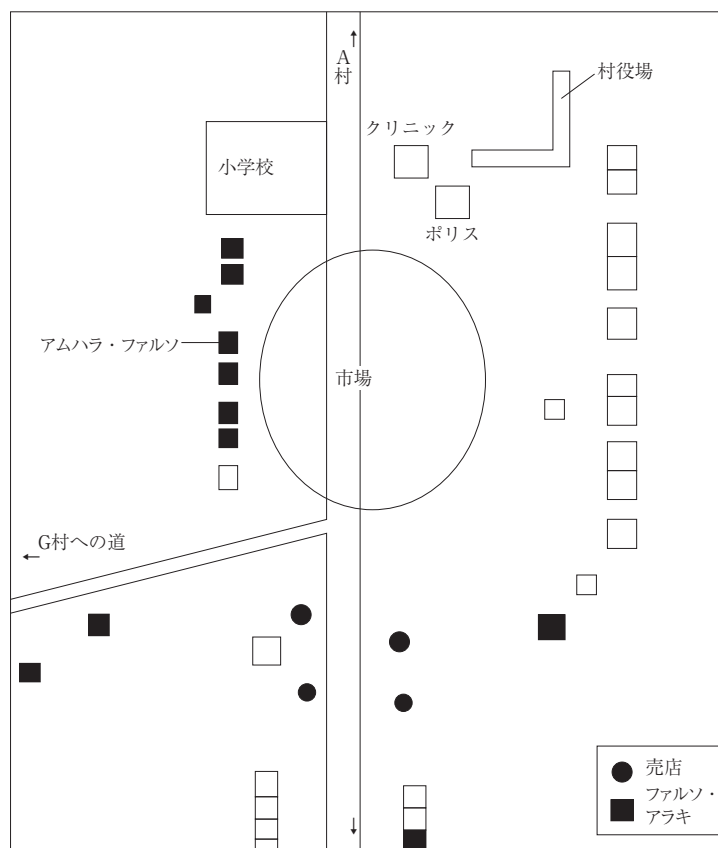


図2 定期市広場周辺の見取り図

プラスチックのタンクに入れて広場に売りにやって来る。彼女たちは広場に来ると、椅子用の丸太をおいて自分の店のスペースを確保する。

広場周辺に住む女性は自分の家でお酒を売ることもある。広場から1 kmの距離の間にある63戸のうち市場の日にアルコール飲料を売る家は、ファルソのみを売る家が1軒、ファルソとアラキを売る家が9軒、アラキのみを売る家が4軒、アムハラ・ファルソ（アムハラ人から伝わった醸造酒⁴⁾）とアラキを売る家が1軒であった（図2）。

(2) 家庭

ファルソは売買のために造る以前は、たいていは家庭で造り飲んでいた。娘は母親から造り方を教わり、その技術が今日まで受け継がれてきた。現金獲得を目的とする醸造になってから、あるいはプロテスタントに改宗してからは家庭で飲むことはあまりなくなった。現在ではファルソを家庭で飲む場合、客をもてなすために造ったり、どこかの店から買ってきたりして家で飲むということが多い。しかし、G村に住むボッドソント信仰の人たちは、昼食後などにもファルソを飲む習慣が残っている。司祭の母親（2007年現在、推定110歳）は、孫が市場で買ってきたアラキを毎晩飲むという。

(3) 共同労働 (*dubo*)

テフやトウモロコシの収穫時や耕起のときの共同労働は、通常10人から20人で構成される。労働が終わったあと、彼らは集まって皆でファルソを飲む。これは本来、雑穀を収穫できた報酬として雑穀から造った酒を飲むという意味があるようだ。雑穀酒は元々農業と密接に関係していたことが分かる。しかし、プロテスタント化してからは、ファルソを飲まなくなった人たちは、共同労働のあとファルソではなくオオムギで造った非アルコール飲料のカリブ (*karibu*) を飲むようになり、インジェラやパンを食べるようになった。



写真5 共同労働の後にファルソを飲む

(4) 集会後

C村では月曜日と水曜日に男性のみが集まる集会がおこなわれるが、集会後の一服として男性たちはファルソを飲みに行く。また女性の集会は金曜日にあり、同様に女性たちは売りにやって来るファルソを飲む。女性たちはダゴ (*daggo*)⁵⁾ という特有の飲



写真6 ダゴをする女性たち

み方をする。これは二人の女性が一緒に一つのコップで飲む飲み方で、親しい関係のしるしだという。友人関係や姉妹、あるいは第一夫人と第二夫人と一緒にダゴをする光景は頻繁にみられる。

6 女性にとっての飲酒

6-1 ローカル・ビールの日常性

コンタ社会では女性が飲酒をおこなってはいけないという規制はない。女性も男性と同じようにお酒を飲んでおり、とくにファルソは女性一人でも抵抗なく店に行って飲むことがある。表1は、定期市でファルソを売る店を訪ね、それぞれ約10分間の観察によって得られた男女別の人数の統計である。A～Eの店はすべて定期市の広場で開いており、売り手の女性はすべてC村出身、値段もすべて同じである。

表1 10分間の来客者数（ファルソ）

表1	A	B	C	D	E	合計
女性客	18	7	6	8	9	48
男性客	0	8	12	3	1	24
合計	18	15	18	11	10	72

* 2007年1月データ

* 単位：人

次の表2は、同じ条件でアラキを売る店での統計である。ただし、売り手の女性のFとGはC村の出身者であるが、H、I、Jは隣のT村出身である。

表2 10分間の来客者数（アラキ）

表2	F	G	H	I	J	合計
女性客	0	0	0	0	2	2
男性客	5	3	9	3	14	34
合計	5	3	9	3	16	36

* 2007年10月データ

* 単位：人

表1と表2を比較しても分かるように、ファルソを飲む女性はいてもアラキを飲む女性はほとんどいない。女性が一人でアラキを飲む光景をほとんどみかけない理由として、一つはアルコール度数の強さ、もう一つはファルソとアラキに対する認識度の違いである。即ち、女性は外部から入ってきた「新しい」アラキに対して、男性よりも慣れ親しむ機会が少ない、ということが推測される。

ファルソ屋の客層は男女を問わず、女性の方が多い店や女性だけの客の店もある。売り手と親しい関係のある女性は、一人で店にやって来ることもある。女性にとって、ファルソは昔から慣れ親しんでいる日常的な嗜好品であり、アラキよりも「禁じられているアル

コール飲料」という認識の薄さが感じられる。

6-2 生計手段としての酒造り

しかし、C村のプロテスタント化によって少なくともファルソやアラキの消費量は以前と比べれば減少している。それまで酒造りを営んでいた女性のなかにも、プロテスタントに改宗してからは酒造りをやめて代わりのものを造るようになった女性もいるし、酒造りはするが自分は飲まないという女性もいる。

酒造りはするがプロテスタントになったために飲まなくなったというある女性に、他のものではなくなぜファルソやアラキを造って売なのかと尋ねると、「それらの原料であるトウモロコシ、モロコシ、テフなどの穀類はパンの原料ともなるので、現金収入にもなるうえに日々の食事にもなり一石二鳥だから」という。実際、アラキの原料で作った無発酵パンはアラキ・ウツァ (*araqe us'aa*) と呼ばれ、昼食などに食べることがある。これは、アラキの固めのパンという意味だがアルコールは発生していない。

C村における敬虔なプロテスタント信者である女性是这样のように話す。

ファルソは元々、家で飲んだりもてなしたり共同労働のときに飲んでいました。お酒造りをするのは女性だけです。ファルソが市場で売られるようになったのは最近になってから。それまで女性はファルソを売っていることを知りませんでした。昔はたいてい家で飲むだけでした。(女性, 50代)

この話からは、それまで家庭とつながりの深かったファルソが、最近では女性のビジネス手段となっていることが分かる。飲むという行為は別として、プロテスタントに改宗した女性でも現金獲得を目的としてファルソやその他のアルコール飲料を造ることは可能である。しかし、ファルソやアラキの原料である雑穀を食事にも応用することから、そこに依然として家庭の日常生活から離床できていないアルコール飲料の存在がみえてくる。

とくに母子世帯の女性にとっては重要な現金収入源であるが、酒造りを営むのはすべてが寡婦であるというわけではない。定期市広場周辺にあるバー15軒のうち、売り手が寡婦である店は5軒（アラキのみが2軒、ファルソとアラキの両方が3軒）である。さらに売り手が第二夫人である店が1軒（ファルソとアラキの両方）であった。C村の道路沿いにある茅葺き屋根の家に住む寡婦は、夫を亡くしたあとにプロテスタントに改宗し、ファルソやアラキを造って売ようになったという。

私はC村で生まれ、ここに住む夫の家に嫁ぎました。今は末っ子の娘と二人で暮らしています。6年前に夫が亡くなってから、アラキやファルソを造って売ようになりました。夫は農家でトウモロコシやモロコシを作っており、その頃は家事だけをしていました。昔は夫と同じボッドソント信仰でしたが、夫が亡くなってからプロテスタントに改宗しました。ファルソの造り方は昔母親に教えてもらったので知っています。ファルソは日曜日だけ売るようにしていて、一日の収入は15ブル程度。2週間に

一度、3リットルのアラキを造って売っています。

(女性、60代)

この女性の1ヶ月の収入を概算すると、1リットルのアラキを14ブルとして、だいたい100~140ブルとなる。一緒に暮らす娘は4年生まで学校に通ったが今は家事の手伝いをしているという。C村では生活するにあたって必要な1ヶ月の予算は170ブルだという。この女性はさらに家庭菜園でタロイモやサツマイモ、アボカドやエンセーテなどを栽培しており、それらの作物を売ることでも収入を得ている。女性二人が暮らすうえで、彼女の収入はやや少ないかもしれないが、家庭菜園の作物で多少の食費をカバーできている。

酒造りは母から娘へと受け継がれるため、教育を受けていない女性でもおこなえる仕事である。しかし、ここ数年でC村における女性の就学率が徐々に高くなってきていることから、今後酒造りで生計を立てていく女性が減っていくことも予想される。

6-3 非アルコール飲料の売買

プロテスタントの浸透にともなって、C村では非アルコール飲料が広まっていった。オムギで造ったカリブというジュースや、蜂蜜ジュースであるブルズ (*buluz*)、穀物で造ったシャメタ (*Shameta*) という新たな飲み物が一般的に飲まれるようになった。とくにカリブは人をもてなすときや共同労働のあとにも飲むことがあり、ローカル・ビールの代わりの役割を果たしているといえる。

これらはすべて外部から入ってきた飲み物であるが、お酒を飲まなくなった人たちによって受容され、売買されるようになった。定期市で観察できた各店の客層は、すべてプロテスタントの信者であることも分かった。しかし、定期市での非アルコール飲料の消費空間はファルソやアラキのそれとは異なり、客の数もそれほど多くはなく静かである。

プロテスタント信者のなかには、プロテスタントであるのにお酒を飲む人たちに対して「彼らは真の意味でプロテスタントではない、イエスのことなんて何も分かってない」と嫌悪感を示す人がいる。しかし、禁酒をする人としらない人が普段の生活において交流をもたないというわけではなく、彼らは日常において互いに許容しあっている。実際、C村の教会の運営にも携わっている敬虔なプロテスタントでお酒を飲まない女性村長と、プロテスタントだが飲酒をおこなう副村長の女性は、互いに協力し尊重しあう仲である。

酒造りに従事する女性たちの飲酒はプロテスタント化にともない、非アルコール飲料の浸透や女性の生計手段とのかかわりあいのなかで多様に変化してきた。その変化の様相は、土着の宗教とプロテスタントの接触の結果ともいえるだろう。

7 コンタクト・ゾーンとしての飲酒空間

6章で示したように、C村における飲酒空間は、複数の信仰の接触を通じて新たに創出されてきた。それだけではなく、C村の飲酒空間は「異民族」のコンタクト・ゾーンでもある。

C村の定期市における飲酒は広範囲な他地域の人びとが交流する場である。C村と同じ

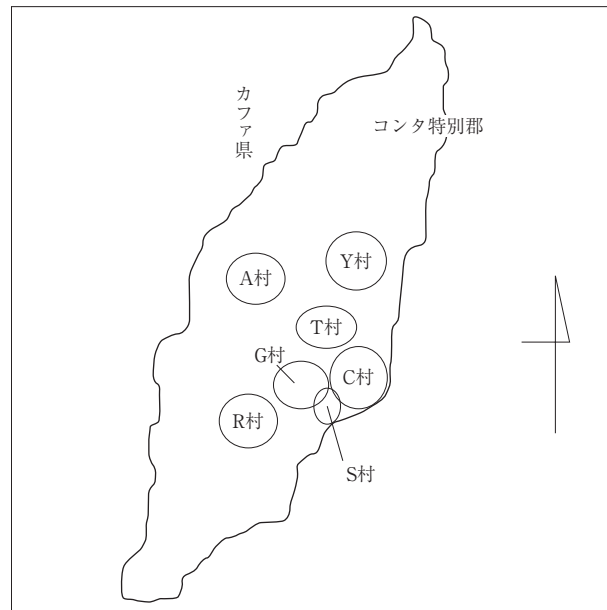


図3 C村周辺の村の配置

幹線道路沿いのT村やS村、Y村やR村、G村などから来る人が割合多いが、日曜定期市の日にはコンタの中心地であるA村や、コンタと隣接するカファ県、さらにはカファの北に位置するジンマという都市からやって来る人もいる（図3）。彼らは、定期市で穀物を売買しに来るついでにファルソやアラキを飲んで一服したり、たんに休息や娯楽を目的として飲みに来たりする。前者は女性に多く、後者は男性に多いことも特徴的であった。

また、地域間だけでなく宗教の違いや身分の違いをこえて飲酒空間は存在している。たとえば、ファルソ屋には男性だけでなく女性も多く飲みに来るということは6-1でも説明したとおりである。混在するのは性別だけでなく、宗教の異なる人たちも同じである。プロテスタントやオーソドックスの信徒はもちろん、G村のボッドソント信仰の人びとも一つの店で交流する。

ファルソ屋に飲みに来ていたある土器職人の男性（20代）に「宗教は何ですか？」と筆者が唐突に質問すると、初めは戸惑っていたが周りの客たちに「問題ないから教えてあげなよ」と促され、「プロテスタント」だと答えてくれた。

かつて土器職人はマイノリティとして差別され、他の階層の人たちとともに飲食をすることが禁止されていた。このような集団の成員の混在は、プロテスタント化によって階層の関係なく、ともに飲食することが可能になった平等主義の結果であるともいえるだろう。さらに付け加えると、プロテスタントに改宗した人がかつての精霊崇拝に嫌悪感を抱き、反対に精霊崇拝の信徒がプロテスタントを「汚すもの」として嫌っているにもかかわらず、両者は飲酒の場において共存していることにも注目したい。

このように、さまざまな境界を異にした人たちが集う飲酒の場は、たんに売買するだけの場とは違い、長時間居座って互いに話をする社交の場でもある。そこでは、値段交渉もなく、空いている場所に座って、コップに酒が注がれるのを待つだけである。一人でやっ

て来て寡黙に飲酒をおこなう男性もいるが、たいていは、女性なら市場で買ったものの値段の話、男性なら耕作や家畜に関する話などをしている。一緒にやって来る者同士の会話もあれば、店内で一つの話が展開されることもある。家でお酒を売っている店は、壁に沿って椅子が置かれているために客が輪になって飲酒することになるので、ある話題について皆が話に入りやすくなるのである。

このことから、飲酒が「男性間の社交の場」というブライソンやパートネンによる主張 [Bryceson 2002; Partanen 1991] に、「女性の社交の場」であることも付け加えることができるだろう。

8 おわりに

以上みてきたように、C村ではプロテスタントと現地の人びとが接触したことによって、いくつかの変化が生じてきた。プロテスタントに改宗した人びとのなかには、ローカル・ビールを禁止の対象にする者もいれば、改宗後もこれを飲み続ける者もいる。後者については、「アルコール飲料」からより日常的な「コンタの飲み物」への変化を認めることができないだろうか。さらに信徒たちは、プロテスタントの平等性と関連して、土器職人や鍛冶職人など差別の対象とされてきた人びと、また宗教や性別の違いにもかかわらず「異民族」の人びとがともに存在できる空間を創出することができた。

このことは、ダグラスがいうように「飲酒は多様化した社会的要素をつなげる役割を果たす」[Douglas 1987:8] だけでなく、飲酒を通じて生まれる一つの世界が柔軟で流動的なものであることを示唆しているだろう。

注

- 1) 特別郡とは、県には満たない面積と人口を有する民族に対して与えられる行政区分であり、郡よりも大きく、県と同等の行政単位とみなされる。現在エチオピアでは民族自立政策をとっており、ほとんどすべての民族に対して1民族につき1行政区分に組み入れるのが原則とされている。
- 2) コンタ周辺地域における精霊崇拝は他に、シヨシャのアッシェロント、ヨラのミチャダ、カファのイバダ・ドント、ダダなどが存在する。
- 3) キリスト教徒が精霊崇拝を軽蔑するという言葉に「ツァラへ (*tsalahe*)」という言葉があるが、語義は不明。
- 4) C村においてアムハラ・ファルソを醸造する女性は一人しかいない。その女性は、昔アムハラ人と交流のあった母親に造り方を教えてもらったという。一般的なファルソのようにどろどろしておらず、ホップを利用した苦みのある醸造酒である。
- 5) ダゴ (*daggo*) という言葉は、しばしば「ダーゲッテース (*daage'ttees*)」すなわち「一つのコップで二人同時に飲む」という動詞として用いられる。

参考文献

- 杉山祐子 1996 「農業の近代化と母系社会——焼畑農耕民ベンバの女性の生き方」田中二郎他編『続自然社会の人類学』アカデミア出版会, pp. 271-303。
- 西井涼子 2006 「社会空間の人類学——マテリアリティ・主体・モダニティ」西井涼子・田辺繁治編『社会空間の人類学——マテリアリティ・主体・モダニティ』世界思想社, 1-29頁。

- Bryceson, Deborah Fahy 2002 Alcohol in Africa: Substance, Stimulus, and Society. In Deborah Fahy Bryceson ed., *Alcohol in Africa : Mixing Business, Pleasure, and Politics*. London: Heinemann, pp. 3-21.
- Douglas, Mary 1987 A Distinctive Anthropological Perspective. In Mary Douglas ed., *Constructive Drinking : Perspective on Drinking from Anthropology*. London: Cambridge University Press, pp. 3-15.
- Hallpike, C. R. 1972 The Konso of Ethiopia: A Study of the Values of a Cushitic People. Oxford: Clarendon Press.
- Luning, Sabine 2002 To Drink or Not to Drink: Beer Brewing, Rituals, and Religious Conversion in Maane, Burkina Faso. In Deborah Fahy Bryceson ed., *Alcohol in Africa : Mixing Business, Pleasure, and Politics*. London: Heinemann, pp. 231-248.
- Naty, Alexander 2005 Protestant Christianity among the Aari People of Southwest Ethiopia, 1950-1990. In Verena Boll and Steven Kaplan eds., *Ethiopia and the Missions : Historical and Anthropological Insights*. Münster: Lit Verlag, pp. 141-152.
- Partanen, Juha 1991 *Sociability and Intoxication : Alcohol and Drinking in Kenya, Africa, and the Modern World* (The Finnish Foundation for Alcohol Studies, vol. 39). Helsinki: The Finnish Foundation for Alcohol Studies.
- Roberts, Bruce D. 2000 Always Cheaply Pleasant: Beer as a Commodity in a Rural Kenyan Society. In Angelique Haugerud, M. Priscilla Stone and Peter D. Little eds., *Commodities and Globalization : Anthropological Perspectives*. Lanham, MD: Rowman & Littlefield, pp. 179-196.